芥川龍之介「軍艦金剛航海記」論

―第一次世界大戦と軍備拡張の時代の中で―

塚本章子

はじめに

芥川龍之介の「軍艦金剛航海記」（大六・七・二五～二九、『時事新報』）は、これまであまり詳細に論じられて来なかったルポルタージュである。

だがこの記録文は、大正五年一二月から大正八年三月までの一時期とはいえ、横須賀の海軍機関学校英語教授嘱託として軍の内部に身を置いた芥川が[1]、当時の海軍をどのように捉えていたかを探ることができる文章である。

芥川は、大正六年六月一〇日付江口渙宛書簡に「十五日から金剛へのつて航海見学といふものに出かけるんです」と書いている。同月二〇日消印の松岡譲宛葉書には、「愈〻今日フネにのる事になつた　この頃胃を悪くしてゐるから酔ふだらうと思つて聊恐れてゐる二十四日の夕方かへる予定だ」とある。そして翌七月六日の塚本文宛書簡に、「こなひだは横須賀から山口県の由宇と云ふ所まで軍艦で行つてそこから岩国と京都とによつて帰つて来ました」とある。

金剛に乗船したのは六月二〇日、横須賀から山口県由宇まで航海し、帰りは岩国、京都を経由して二四日に帰宅したと考えられる。

日露戦争（明三七・二～三八・九）後から第一次世界大戦（大三・七～七・一一）にかけての軍備拡張時代、軍隊は巨大組織となっていく。当時世界の注目を集めた新鋭の超弩級巡洋戦艦金剛に乗船した芥川が、何を描き、あるいは何を描かなかったかを捉えることによって、彼が海軍、戦争、そして文学をどのように見ていたかが分かって来るのではないか。文章中になされた様々な引用にも注目しながら、探っていきたい。

一

芥川が軍艦金剛に乗船した大正六年六月は、第一次世界大戦の最

中であった。日本は大正三年八月に参戦し、九月から一〇月にかけて、海軍第一艦隊はドイツ領南洋群島（ヤップ島、サイパン島など）を占領した。さらに、大正六年二月には、地中海に駆逐艦を派遣している。その三月にはロシア革命が起き、一一月にはレーニンがソヴィエト政権を打ち立てる。翌七年八月に、日本は社会主義国家樹立に反対してシベリア出兵をおこなうことになるのである。

日露戦争でバルチック艦隊を撃破した海軍においても、軍備拡張が続けられていた。その一つが、この二代目金剛[2]と、さらに続く同型艦の建造であった。

明治四〇年制定の「帝国国防方針」に掲げられた八八艦隊（戦艦八隻・装甲巡洋艦八隻）の建設は、八四艦隊、八六艦隊の段階を踏み、大正九年の帝国議会で完成予算に達する[3]。

大石嘉一郎氏[4]は、「海軍では（略）「八・八艦隊」の編成をめざし、一九〇七年度予算に新たに補充艦艇製造費七六五七万円（七ヵ年継続費）、臨時軍事費会計からの引継ぎにかかる艦艇補足費六四〇七万円（六ヵ年継続費）および艦艇・兵器整備費一億一〇九二万円（七ヵ月継続費）が計上され、合計三億五一四三万円におよぶ計画となった。（略）さらに一九一一年度にこの計画が改訂され、八二八七万円が追加されて合計四億三四三〇万円となる」ったと述べる。

また、山田朗氏[5]によれば、大正六年の一般会計軍事費（戦費を含まず）は一般会計歳出額の三八・八九％を占めている。前年大正五年には三五・七九％であり、二年後の大正八年には四五・七八％に増加している。山田氏は、「日本も世界的な建艦競争に参入したために、（略）日露戦争後から第一次世界大戦前（一九〇六―一三）の八年間における一般会計軍事費の割合は、対国家歳出比で平均三二・八％、対ＧＮＰ比四・六二％であった」と述べている。

当時、世界的な建艦競争の中で、日本でも軍艦建造に膨大な費用がつぎ込まれ、軍事費は膨張を続けていたのである。

そして金剛の建造を巡って、大正三年一月には、世論を騒がせ当時の山本権兵衛内閣を総辞職させた収賄事件、シーメンス事件が起きていた[6]。この戦艦には大きな注目が集まっていたのである。

金剛は、明治四四年一月一七日起工、大正元年五月一八日進水、大正二年八月一六日に日本に引渡された。

技術的な面から言えば、金剛は、明治四三年前後において「世界の造船史に記録されるべき[7]」とされるイギリスが開発した超弩級巡戦ライオンをもとに、イギリスのヴィッカース社で設計建造された軍艦であった。発注の際、英日両国政府の約束によって日本海軍の技術者が派遣され、図面も日本が入手し、これを使用して同型艦を日本国内で建造することになった。そして比叡、榛名、霧島が建造されたのである。

金剛は、日本の軍艦史から見て飛躍的な戦艦と考えられる。福井

静夫氏[8]は、

大正二年（一九一三）、すなわち薩摩完成のさらに四年後に、わが国は、世界一の巨艦金剛を保有した。そしてその排水量は実に二万七五〇〇トン、すなわち薩摩級の約二万トンにたいして、さらに約四〇パーセントもましたのだ。

つまり金剛における飛躍こそ、まさに画期的であったといわねばならない。

と述べている。芥川は「二万九千噸の巡洋艦」と記しているが、金剛の排水量は二七五〇〇トンである。

さらに福井氏は、金剛の艦の長さも、「六五三フィート六インチであって、薩摩より二〇〇フィート以上長い。その増加は四五パーセント以上である。」、「いっきょに五〇パーセントくらいも大きく（長く）なった」と指摘する。そして、「金剛型の主砲は一四インチ砲である。当時、英海軍が一三・五インチを採用中であったから、これより少しでも威力のある大口径砲を採用したのだが、わが主力艦が、率先して世界最大の巨砲を搭載したのは金剛である。」と述べる。氏は、金剛の名は「完成以来、世界にとどろいた」と指摘している。

当時、読者は金剛の装備や能力の優秀さについて読むことを期待したであろうし、そう語ることも可能であった。一つの例を挙げる。

大正二年一一月発行の『軍艦金剛廻航記』（川畑彌一郎・粥川豊吉、海軍発行所画報社）は、完成した金剛をイギリスから引き取るための、大正元年一二月二〇日から二年一一月五日までの約一年にわたる航海を記録した本である。

この中に「金剛の武力」という項があり、

全長七百四呎（約我が二町）幅九十二呎、排水量二萬七千五百噸、馬力六萬四千、計画速力二十七海里五である。備へてゐる大砲は四十五口径の十四吋砲八門、五十口径の六吋砲十六門、三吋砲十二門、マキシム、機砲四門、二十一吋最新式水中魚雷発射管八門、合計四十八門と探海燈十台を備へ加ふるに艦体諸機いづれも日露戦役に於て得たる実験と世界最新式とを採り、熟練したる英国民が赤誠を籠めたる鉄槌の元に工を起して、（略）建造せられた金剛は実に世界最大強の堅艦であると誇る事を憚らないのであるが、なんと快哉を呼ばざるを得ないではないか。

と、書かれている。そしてこの本の末尾には、「軍艦金剛廻航委員諸君を送る[9]」や、「金剛の歌[10]」といった、金剛を讃える歌詞が掲載されており、これらの歌が、人口に膾炙していたと見られる。

大正四年には扶桑、大正六年には山城、伊勢が完成するが、金剛ほどの著しい飛躍ではなく、数年が経過してはいても、まだ金剛が与えるインパクトは大きかったと考えられる。

だが、芥川の文章には、金剛を讃えるという姿勢は見られない。船内を物珍しそうに巡りながらも、彼の関心は違う方を向いている。

それは、次の文章にも表れている。

すると、狭い通路には、もうハムモツクを釣つて、眠つてゐる水兵が大勢ある。（略）僕たちは皆な背をかがめてそのハムモツクの下を這ふやうにして歩いた。その時僕は痛切に「軍艦の臭ひ」を嗅いだ。これはペンキの臭ひでもなければ、炊事場の流しの臭ひでもない。さうかと云つて又機械の油の臭ひでもなければ、人間の汗の臭ひでもない。恐らくそれらのすべてが混合した、――要するにまあ「軍艦の臭ひ」である。これは決して高等な臭ひではない。こんな事を考へながらふと頭をあげると、一人の水兵の読んでゐる本の表紙が、突然僕の鼻の先へ出た。それには、「天地有情」と云ふ字が書いてある。――僕は一瞬の間、「軍艦の臭ひ」を忘れた。さうして妙に小説めいた心持になつた。

彼は、「痛切に」嗅いだ「軍艦の臭ひ」を、「決して高等な臭ひではない。」と記し、土井晩翠の「天地有情」の題字を見付け、息をついているのである。

さらに、次の場面も見ておきたい。

すると僕の隣へ来て、「二十年前の日本と今日の日本とは非常な相違です」と云ふ人がある。その人はシイメンのタイプに属さない、甚だ感じの好い顔をしてゐた。さうしてその顔がまつ赤になつてゐた。何でも国防計画か何かを論じてゐるらしい。（略）僕には、二十年以前の日本と今日の日本と、何がどうちがふんだか、実は少しも分らなかつた。

大正六年から二〇年前といえば、明治三〇年である。日清戦争（明二七・八～二八・四）が終わった後である。

日露戦争に勝利したことで日本が一等国になったという目で見れば、あるいはまた、この金剛のような超弩級戦艦の出現や建艦競争という面から見れば、確かに「二十年前の日本と今日の日本とは非常な相違」であろう。だが芥川は、「何がどうちがふんだか、実は少しも分らなかつた。」と述べている。

西洋列強への参入や軍拡競争に、何の意味も見出せないという冷ややかな視線が示されているのである。

二

このルポルタージュの冒頭には、新婚のS君に対する「憐憫」が描かれている。

すると其少尉の一人が横須賀でSとSの細君と二人で散歩してゐるのに遇つたら、よくよく中てられたと見えて、其晩から腹が下つたと云ふ話をした。外の連中はそれを聞くと、あはは と大きな声を出した。唯新婚後間のないSだけはその仲間にはいらなかつた。これは嬉しさうに、にやにや笑つたのである。

自分は、（略）新らしい細君を家に残して来たSに対して憐憫

に近い同情を感じた。

新婚早々離れ離れになったS君に芥川は憐れみを感じる。このことは頭を離れないようで、他の場面でもS君のことが描かれている。

食卓につくと、すぐにボイが食事を持つて来てくれる。さうして静に、しかも敏活に、給仕をしてくれる。僕は生鮭の皿を突つきながら、Sに「軍艦のボイは気が利いてますね。」と云つた。Sは「ええ」とか何とか気のない返事をした。事によると、これは軍艦のボイより、細君の方が気が利いてゐると思つたからかも知れない。

「かうやつて下を見てゐると、ちよいと飛込みたくなるぜ。」僕はかう声をかけた。するとMはそれに答へないで、近眼鏡をかけた顔を僕の側へ持つて来ながら、「おい、俳句が一つ出来た」と云つた。「どんな句が出来た?」「遠流びと舟に泣く夜や子規。」と云ふんだ。S君の事をよんだんだがね。」二人は低い声で笑つた。

芥川は、何度もS君のことを気にかけているのである。ここには、芥川自身が大正五年一二月に塚本文と婚約していたという事情も反映していると思われる。そしてまた、航海見学であったとはいえ、第一次世界大戦中である。いつ戦場へ送られるかという緊迫感はあっただろう。S君への憐れみに何度もこだわる言葉の背景に、日露戦争でセンセーションを起こした与謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」（明三七・九、『明星』）の第五連、「暖簾のかげに伏して泣く／あえかにわかき新妻を／君わするるや思へるや／十月も添はでわかれたる／少女ごころを思ひみよ」[11]という一節を想起することは不自然ではあるまい。

三

金剛の缶室もまた、以前には見られぬ巨大なものであった。福井静夫氏[12]は、「巡洋戦艦は速力がはやいから、大馬力を要し、膨大な罐室区間を必要とし、かつ燃料搭載量も多く、どうしても艦型だけは大きくなりがちである。これは英国海軍が、ライオン型を建造したときにはじめてみられた現象であった。」と、述べている。

このライオン型を基にした金剛の缶室を見ながら、芥川が考えたのは次のようなことであった。

僕が先づ思ひ出したのは「パラダイス・ロスト」の始めの一章である。かう云ふと誇張の様に聞えるかも知れないが、決してさうではない。眼の前には恐しく大きな缶が幾つも、噴火山の様な音を立てて並んでゐる。缶の前の通路は、甚だ狭い。その狭い所に、煤煙でまつ黒になつた機関兵が色硝子をはめた眼鏡を頸へかけながら忙しさうに動いてゐる。或る者はショヴルで、缶の中へ石炭を拋りこむ。或者は石炭桝へ石炭を積んで押して

来る。それが皆缶の口からさす灼熱した光を浴びて、恐ろしいシルエットを描いてゐる。(略)其上暑い事も亦一通りではない。僕は半ば呆気にとられて、この人間とは思はれない、すさまじい労働の光景を見渡した。

芥川は、「人間とは思はれない、すさまじい労働」に目を見張るのである。彼が思い出した「パラダイス・ロスト」の「始めの一章」というのは、次の一節であろう。[13]

見てみれば、忽ち眼前に浮かび上がるのは、荒涼として／身の毛もよだつ光景、戦慄すべき一大牢獄、四方八方焔に／包まれた巨大な焦熱の鉱炉。だがその焔は光を放ってはいない。／ただ眼に見える暗黒があるのみなのだ。そしてその暗黒に／照らし出されて、悲痛な光景が、悲しみの世界が、鬼哭啾々たる／影の世界が、展開している……。そこには、平和もなければ／安息もなく、すべての者に訪れるはずの希望も訪れないのだ。／それどころか、果てしなき責苦と、絶えず燃えつづけ／しかも燃え尽きることのない硫黄にかきたてられた劫火の／洪水が、間断なく荒れ狂っている。永遠の正義の神が／叛逆の徒のために設けておられたのは、まさしくこのような／場所であり、いや果てのこの暗黒の一角こそ彼らの牢獄、／彼らの宿命の場所として神の定められていた所であった。／

彼が想起するのは、「悲痛な」、地獄の光景であり、ここに賞賛の思いは見られない。芥川は、暗い艦の底で機械に翻弄されながら働く機関兵たちを、目を離さずに描き続ける。

現にその時も二三人、その暗い炭庫の中で、石炭をシヨヴルで下してゐる機関兵の姿が見えた。彼等は皆黙々として運命のやうに働いてゐる。外に海があつて、風が吹いて、日があたつてゐる事も知らない人間のやうに働いてゐる。僕は妙に不安になつた。さうして、誰よりも先きに、元の入口をボイラアの前へ這ひ出した。が、ここでもやはり、すさまじい労働が、鉄と石炭との火気の中に、未練未釈なく続けられてゐる。海の上の生活は、陸の上の生活に変りなく苦しい。

彼は、陸上と変わらぬ労働する人間の苦しみを感じる。そして、次のように「或る考へ」にとりつかれていくのである。

それがどこへ行つても、空気が息苦しい位生暖かくつて、いろんな機械が猛烈に動いてゐて、鉄の床や手すりが油でぴかぴか光つてゐて、僕のやうな労働に縁の遠いものは、五分とそこにゐると、神経にこたへてしまふ。が、その間に絶えず、或る考へが僕の頭にこびりついてゐた。それは欧洲の戦争が始まつて以来、僕位の年齢のものが大抵考へるやうになつた、或る理想的な考へである。今このケビンの寝台の上にころがつて、くたびれた足をのばしながら、持つて来たオオベルマンの頁をはぐつてゐる間もやはりその考へは、僕をはなれない。

すさまじい「労働」を見た彼の頭に「こびりついて」いた「或る考へ」、「欧洲の戦争が始まつて以来、僕位の年齢のものが大抵考へるやうになつた、或る理想的な考へ」とは何だろうか。

芥川の「保吉もの」の一つ、横須賀時代の自身をモデルに描いた「あばばばば」（大一二・一二、『中央公論』）には、「保吉はまづポケットからSpargoの「社会主義早わかり」を出した。」とある。

江口渙[14]は、大正七年頃の状況について「労働問題が声高く叫ばれはじめたときであり」、作家のあいだにも「労働者の生活、労働者の姿に目を注ぐ、いわゆる労働文学を書かなければいけないという傾向がおこりつつあった」と述べている。さらに、大正六年から九年頃にかけての「見おとしてはならない特徴」として、「それまで文壇から閉め出されていた社会主義や無政府主義者」が進出し、「「中央公論」や「新小説」から「新潮」「早稲田文学」にまで書くようになった」ことを指摘している。[15]

大正六年四月の衆議院選挙では、堺利彦が立候補している。松尾尊兊氏[16]は、「第一次世界大戦下に登場した藩閥直系の寺内正毅内閣の下で、社会主義者が公然と選挙戦に登場した意義は大きかった。（略）在京の社会主義者は大杉栄をのぞき、山川均・荒畑寒村もふくめて、選挙戦に協力した。一部の民本主義的知識人はこの挙に進んで賛同した。」と述べている。そして、内田魯庵も堺を支持し、馬場孤蝶・生田長江・安部磯雄・三宅雪嶺も応援演説に出向いたことを指摘している。

「或る考へ」とは、社会主義思想であろう。第一節で述べたように、ロシアで二月革命が起きた後の時期、海軍に属する芥川が実習中に戦艦の上でこのような考えに取り付かれることは、本来は許されないことであろう。それ故に彼は、「或る考へ」としか書けなかったのであり、この矛盾は大きな葛藤となっていくと思われる。

また彼は、士官室や士官次室の様子も、丹念に伝えている。

士官室では大きな扇風器が幾つも頭の上でまはつてゐた。その下に白いテーブル掛をかけた長い食卓が二側にならんで、つきあたりの、鏡を入れた大きなカツプボオドには、銀の花瓶が二つ置いてあつた。食卓につくと、すぐにボイが食事を持つて来てくれる。さうして静に、しかも敏活に、給仕をしてくれる。

湯から上ると（略）浴衣に着かへて、又士官室へ行つた。軍艦では夕飯の外に、もう一つ晩飯がある。その晩はそれが索麪だつた。僕はそこで酒をすゝめられた。

その後で、士官次室へ招待されて皆で出かけたら、浴衣がけで、ソファにゐた連中が皆立つて、僕たちの健康とSの結婚とを祝してくれた。（略）この先生は、僕にハムだのパインアツプルだの色んな物を呉れた。さうしてその合ひ間には、「自来也はん」

とか何とか云つて、僕のコツプへ無暗にビールを注いだ。

船底の暑く地獄のような世界に対し、涼しく、食べ物と酒に溢れた優雅な士官室、士官次室が描かれている。芥川は、海軍の中にある機関兵と士官との階級格差を見つめているのである。[17]

四

次の場面にも、注目したい。

何だらうと思つて、ハツチを上つて見ると、第四砲塔のうしろに艦中の水兵が黒山のやうに集まつてゐた。さうしてそれが皆、大きな口をあいて、「勇敢なる水兵」の軍歌を唱つてゐた。ケエプスタンの上に、甲板士官がのつてゐるのは、音頭をとつてゐるのであらう。こつちから見ると、その士官と艦尾の軍艦旗とが、千人あまりの水兵の頭の上に、曇りながら夕焼けのした空を切りぬいて、墨を塗つたやうに黒く見えた。下では皆が、塩辛い声をあげて、「煙も見えず雲もなく」とうたつてゐる。僕はこの時も亦、その或る考へに襲はれた。勇ましかる可き軍歌の声が、僕には寧ろ、凄壮な調子を帯びて聞えたからである。

僕はオオベルマンを抛り出して眼を閉つた。艦は少し揺れ始めたらしい。

「勇敢なる水兵」は、日清戦争の黄海海戦で、旗艦松島に戦艦定遠の砲弾が命中した時、一人の水兵が瀕死の重傷を負いつつ傍にいた副長に敵艦の情勢を問うたエピソードに佐々木信綱が感動して作詞し、明治二八年二月、『大捷軍歌』第三編に発表された軍歌である。もとは一〇連であったが、昭和四年、自身で八連に訂正される。芥川が耳にしたであろう訂正前の歌詞を見る。[18]

第一／煙も見えず雲もなく／風も起らず浪立たず／鏡のごとき黄海は／曇りそめたり時の間に／

第二／空に知られぬいかづちか／浪にきらめく稲づまか／煙は空を立ちこめて／天つ日かげも色くらし／

第三／戦今かたけなはに／つとめつくせる勇者の／尊とき血もて甲板は／から紅にかざられつ／

第四／弾丸のくだけのとびちりて／あまたの傷を身におへど／其たまの緒を勇気もて／つなぎとめたる水夫あり／

第五／副艦長のすぎゆくを／痛むまなこに見とめけむ／苦しき声をはりあげて／彼はさけびぬ副長よ／

第六／呼とめられし副長は／彼のかたへにたゝずめり／声をしぼりて彼は問ふ／まだ沈まずや定遠は／

第七／副長の眼はうるほへり／されども声は勇ましく／心やすかれ定遠は／戦ひがたくなしはてぬ／

第八／きゝえし彼は嬉しげに／最後の微笑をもらしつゝ／いかでかたきを討てよと／いふ程もなく息たえぬ／

第九／皇国につくす皇軍の／向ふ所に敵もなく／日の大御旗う

ら〳〵と／東の洋をてらすなり／
第十／まだ沈まずや定遠は／此言の葉は短きも／皇国をおもふ
国民の／心に長くしるされむ／

このように、「尊とき血もて甲板は／から紅にかざられつ」とか、「弾丸のくだけのとびちりて／あまたの傷を身におへど」といった歌詞を、「千人あまりの水兵」が「塩辛い声をあげて」歌っているのである。考えてみれば、すさまじい光景である。遠いところの戦争とはいえ、第一次世界大戦のさなかでもある。

芥川は、「この時も亦、その或る考へに襲はれた。勇ましかる可き軍歌の声が、僕には寧ろ、凄壮な調子を帯びて聞えたからである。」と書く。先に述べたように「或る考へ」が社会主義思想であるとするなら、そこには反戦の思いもあったであろう。[19] 彼は、「オオベルマンを抛り出して眼を閉つた。」のである。

巨大な戦艦の上で、千人を超える合唱は、膨張する海軍という組織の威力を、芥川にまざまざと見せつけたであろう。もはや、正面からは一人で立ち向かえないものを感じさせたのではないだろうか。「艦は少し揺れ始めたらしい。」という言葉には、これから日本が進む時代への不安が表現されているのである。

このような中で、彼は自身の文学をどのように見出していくのだろうか。

五

この文章には、「オオベルマン」という書名が、二度登場する。「持つて来たオオベルマンの頁をはぐつてゐる間もやはりその考へは、僕をはなれない。」、「僕はオオベルマンを抛り出して眼を閉つた。」とある。

「オーベルマン」は、フランスの小説家でロマン派の先駆者とされるエチェンヌ・ピエール・ド・セナンクール（一七七〇～一八四六）によって、一八〇四年に刊行された小説である。

全体が親友に宛てた手紙として構成された書簡体小説である。主人公オーベルマンは、意に添わぬ職業に就く事を拒み、理想の生活を求めてスイスやパリ近郊の自然の中に暮らす。そして、自然の美しさの中で、文学的・哲学的思索を深め、真の人生を模索していくのである。

芥川は、艦上でこの「オーベルマン」を読み続けている。[20] 彼の脳裏に常にこの世界が浮上していたことは、重要な意味を持つだろう。この文章中に見られる自然描写の美しさも、その影響と考えられる。例えば冒頭には、「先に錨をあげた榛名は既に煙を吐き乍ら徐に港口を西に向つて、離れようとしてゐる。それがまた、梅雨晴れの空の下に起伏してゐる山々の鮮な緑と、眩ゆく日の光を反射してゐる水銀のやうな海面とを背景にして、美しいパノラミックな景色をつ

くつてゐる。」といった、印象的な描写がある。

特に注目したいのは、最後の場面である。芥川がこの場面に描く自然の美しさは、深い印象を与えるのであるが、この風景は、「オーベルマン」の一場面との類似を見せるのである。以下に対比する。まず「オーベルマン」を挙げる。(21)（類似点を番号で示す）

僕は下に敷いてゐた苔を長い間凝視してゐたが、その眼をあげて見た瞬間、強い幻覚に打たれた。[1]（略）湖水[2]まで延びてゐる峻しい坂は、丁度僕の坐つてゐる所が小高く突き出てゐるため眼には入らない。それで非常に傾いて見える湖水[2]は対岸を空中に持ち上げてゐるやうに思はれる。靄がサヴォア側のアルプスを一部分蔽つてゐて、山は靄と溶け合つたやうになり、[3]それと同じ色合ひに包まれてゐる。落日の光と、ヴァレーの方にあたる遠景に何もないのとで、これらの山々は高く持ち上り、大地と離れたやうになり、[4]その端々は見別けがつかなくなつてゐる。

（「オーベルマン」第二信）

この箇所は、主人公が旅に出て自然美に感動する最初の場面であり、「オーベルマン」の山場の一つである。続いて芥川の文章を見る。

明くる朝、飯も食はずに上甲板へ出て見たら、海の色[2]がまるで変つてゐるのに驚いた。[1]昨日までは濃い藍色をしてゐたのが、今朝はどこを見ても美しい緑青色になつてゐる。そこへ一面に淡い靄が下りて、其靄の中から、[3]円い山の形が茶碗を伏せたやうに浮き上つてゐる。[4]僕は丁度来合せた機関長に聞いて、艦が既に豊後水道を瀬戸内海へはいつた事を知つた。

（「軍艦金剛航海記」）

「オーベルマン」の風景描写が、芥川の描く風景に重なっているのである。

芥川は、次のような文章を続ける。

僕は妙に気が軽くなつた。（略）陸に近いと云ふ事は何となく愉快である。（略）やがて、何気なく眼を上げると、眼の前にある十四吋砲の砲身に、黄いろい褄黒蝶が一つとまつてゐる。僕は文字通りはつと思つた。驚いたやうな、嬉しいやうな妙な心もちではつと思つた。が、それが人に通じる筈はない。機関長は相変らずしきりにむづかしい経義の話をした。僕は――唯だ、蝶を見てゐたと云つたのでは、云ひ足りない。陸を、畠を、人間を、町を、さうして又それらの上にある初夏を蝶と共に懐しく、思ひやつてゐたのである。

「十四吋砲の砲身」は、第一節で述べたように、世界最大級の巨砲であった。そこにとまった「黄いろい褄黒蝶」を見て、「驚いたやうな、嬉しいやうな妙な心もちではつと思つた。」のである。そして、「陸を、畠を、人間を、町を、さうして又それらの上にある初夏を蝶と共に懐しく、思ひやつてゐた」のである。

彼は、戦艦の開発競争を続け、軍歌によって鼓舞されながら、こ

の巨砲が火を吹く戦闘と殺戮の世界に対峙するものとして、初夏の生命溢れる自然とその中で平穏に営まれる生活の美しさを想起したのである。この最後の場面が非常に力強い印象を感じさせるのは、[22]そのためであろう。付言するなら、それは、先に述べたS君と新しい妻が、離れずに暮らせる平和な世界でもある。[23]

そしてその自然と人間世界の美に生きることに、芥川は不安な時代の中で作家として生きる道を見出していたのではなかったか。

六

芥川の横須賀時代は、塚本文との新婚生活という幸せな一面を持っていたが、同時に、満たされない二重生活の時代でもあった。彼は、生計を立てるため海軍機関学校に勤務し、英語教師にあきたりないものを感じつつ小説を書き続けていた。「永久に不愉快な二重生活」（大七・一一、『新潮』）の中で彼は、「職業として私は英語を教へてゐるから、そこに起る二重生活が不愉快で、しかもその不愉快を超越するのは全然物質的の問題だが、生憎それが現代の日本では当分解決されさうもない以上、永久に我々はこの不愉快な生存を続けて行く外はない」と書いている。

そして芥川は、授業で敗戦の物語ばかり教材にしていたため、敗戦教員と呼ばれていた。芥川の教え子であった篠崎礒次氏が語ったことをまとめた、諏訪三郎氏の「敗戦教官芥川龍之介[24]」には次のように記されている。

彼は、就任匆々、早くも全校に大きなセンセイションを投じることをやり出して、（略）少佐中佐級の教官から、ひどい反感を抱かれることになった。というのは、当時の機関学校の教材は、英文を印刷にしたものを用いており、その内容はことごとく勝利を謳歌する軍国主義的なものばかりで、英語を教えながら、生徒の士気を鼓舞激励するねらいであつたが、芥川教官は新任匆々それを一掃して、教材に用いるものは、すべてが敗戦の物語であり、衰亡の歴史であった。それゆえ一部の生徒からは、反軍的であり娑婆くさいといわれて、早くも敗戦教官のニックネームを烙印された。

また芥川が、「戦争というものは、勝った国も敗けた国も、末路においては同じ結果である。多くの国民が悲惨な苦悩をなめさせられる」と語ったことや、「いまごろ、ヨーロッパでは、ばかなことをしているだろうな?」とひとりごとを言ったことなども述べられている。そして、

あだかも、欧州第一次大戦の最中であり、日本海軍は無敵海軍を誇示して、八八艦隊の出現に国幣の大半をかたむけて狂奔していたころで、若い文官教官芥川龍之介の発言は、武官教官や一部の学生をひどく刺戟させずにおかなかつた。しかし、同じコチコチでも、そこは海軍で、陸軍ほどではなかつた。もしも

芥川龍之介が陸軍の教員であつたら、たちまち反戦主義者として、憲兵隊に拘引されていたに違いない。

と、指摘されている。

やがて、海軍機関学校の定員が倍増することになったとき、芥川は英語教官を退職し、大阪毎日新聞に入社する。

大正七年の小島政二郎宛書簡には、定員が増えて授業も増加することが繰り返し嘆かれている。「海軍拡張で生徒が殖ゑ従つて時間も増す」（大七・九・二二）、「来年から生徒が殆三倍近くも殖ゑて授業時間も今の倍以上になるんだと云ふから大変です」（大七・一〇・一八）、「何しろ四月から先になると海軍拡張が始まりさうなので弱つてゐるのですどう考へても僕の機関学校へ就職した理由と海軍拡張とは根本に於て相容れさうもない」（大七・一〇・二一）とある。膨張していく海軍を前に困惑する芥川の様子がうかがえる。

やがて最後の授業を済ませた芥川は、「教科書出席簿その他皆ストオヴに抛りこんで燃やして」（大八・三・二八、岡栄一郎宛葉書）、学校を去るのである。

また、大阪毎日新聞入社時に書かれた「入社の辞」[25]には、「予は教育家として、殊に未来の海軍将校を陶鋳すべき教育家として、いくら己惚れて見た所が、到底然るべき人物ではない。少くとも現代日本の官許教育方針を丸薬の如く服膺出来ない点だけでも、明に即刻放逐さるべき不良教師である。」とある。

芥川は、「幼稚園にはひつてゐた頃には海軍将校になるつもりだった」[26]という。だが、第一次世界大戦頃の、軍事費が膨張し巨大な権力を持ちつつある海軍の内部に属することは、彼にとって息苦しいものになっていたのである。[27]

「侏儒の言葉」（大一二・一～大一四・一一、『文芸春秋』）の「小児」には、「軍人は小児に近いものである。（略）殺戮を何とも思はぬなどは一層小児と選ぶところはない。殊に小児と似てゐるのは喇叭や軍歌に鼓舞されれば、何の為に戦ふかも問はず、欣然と敵に当ることである。」という、辛辣な言葉が記されているのである。[28]

おわりに

芥川龍之介は、海軍機関学校教官として軍艦金剛に乗船する。だが、彼が記した航海記には、この超弩級巡洋艦を賛美する言葉は見られない。むしろ、第一次世界大戦という戦火の時代に、そして世界的な軍備拡張、建艦競争の時代に、平和を望みながら一人苦悩している姿が浮かび上がってくる。

一時期とはいえ海軍に所属し、急速に巨大化する軍部を目の当たりにした芥川が、作家として選び得たのは、正面からその権力と格闘することではなく、またその内部で要人としてとどまりながら書き続けることでもなく、「或る考へ」を心に抱きながらも、「オーベルマン」に描かれたように、世の中と一線を画し美を求めて孤高に

生きる道であった。

職業を捨て、美の世界や真実の生を希求し旅に出る憂鬱な青年という点で見れば、彼もまた一人のオーベルマンであったと言えよう。

芥川の海軍内部での経験は、彼の文学に一つの影を落としているのである。

注

（1）海軍機関学校での英語教官としての芥川については、岸上英幹「海軍機関学校英語教官芥川龍之介が学生に伝えたかったこと」（『愛知産業大学短期大学紀要』二三号、二〇一一・三）に論じられている。

（2）初代金剛は明治四二年に除籍、翌年に売却解体されている。

（3）外山三郎『日本史小百科28海軍』「八八艦隊」（一九九一・三、近藤出版社）

（4）「資本主義の確立」『岩波講座日本歴史17　近代4』（一九七六・一二、岩波書店）

（5）『軍備拡張の近代史　日本軍の膨張と崩壊』（一九九七・六、吉川弘文館）

（6）兵器輸入に関わる海軍の大汚職事件であり、ドイツの兵器会社シーメンス社からの贈賄や、金剛建造に際してのイギリス、ヴィッカース社からの贈賄が判明した。群集が議会を包囲するなど、山本内閣糾弾の運動が起きた。

（7）福井静夫『福井静夫著作集第一巻　軍艦七十五年回想記　日本戦艦物語Ⅰ』（二〇〇八・五、光人社）

（8）（7）に同じ

（9）御歌所寄人　千葉胤明作歌、海軍々楽長　赤崎彦二作曲「一　征清征露の二大戦　日本海に黄海に　戦功積みし軍艦の　誉を不朽に伝へんと明治の聖の勅に上り　その名同じき金剛艦　大英国にて作られぬ　時は大正第二年（二以下略）」とある。

（10）金剛S作「一、世界に名高き金（ママ）ては英国ウイッカー会社の製造でコチヤ　十四吋が八門よコチヤエー〳〵　二、二十一吋の水雷や速力のほかに類なき堅艦はコチヤ　乗組将士は花ぞろいコチヤエー〳〵（三以下略）」とある。

（11）『明星』辰年第九号（明三七・九）

（12）（7）に同じ

（13）平井正穂訳『ミルトン　失楽園』（一九七九・六、筑摩書房）。『芥川龍之介全集第二巻』「注解（軍艦金剛航海記）」（一九九五・一二、岩波書店）にも指摘がある。

（14）『晩年の芥川龍之介』（一九八八・七、落合書店）

（15）金原左門編『日本民衆の歴史七　自由と反動の潮流』（一九七五・九、三省堂）には「民衆が（略）独自の要求をかかげ、（略）運動をおしすすめる気運は、第一次大戦が勃発し、やがて日本経済が不況から好況に転化するという景気循環のなかで、かえって強まっていった。」とある。またストライキ件数は大正五年に一〇八であったが、大正六年には三九八と飛躍的に増大し、大正七年四一七、大正八年四九七と漸増している。

（16）『大正デモクラシー』（一九七四・五、岩波書店）

（17）芥川の「猿」（大五・八、『新思潮』）にも、このような海軍における階級格差が描かれている。

（18）『大捷軍歌』第三編、但し明三一・一〇発行第九版参照

（19）第二インターナショナルのシュトゥットガルト大会（一九〇七）では戦争反対の決議がなされ、コペンハーゲン大会（一九一〇）、バーゼル会議（一九一二）にも継承される。しかし第一次世界大戦開戦時、各国の党が戦争協力したため第二インターは崩壊した。だがその後、反戦を主張す

る社会主義者たちが、スイスでツィンメルワイド会議（一九一五）、キンタール会議（一九一六）を開き、反戦の動きは続いていく。（フォスター『三つのインタナショナルの歴史』（一九五七・一、大月書店）、西川正雄『第一次世界大戦と社会主義たち』（一九八九・七、岩波書店）参照）

（20）萩原直幸「Oberman ou les aléas d'une œuvre au pays du soleil levant: réception du roman de Senancour au Japon について（自著解題）」（『岡山大学文学部紀要』五九号、二〇一三・七）に、「軍艦金剛航海記」が挙げられ、芥川龍之介は「オーベルマン」を「最初期に読んだ日本人の一人」であり、「おそらく英訳」で読まれていたことが指摘されている。

（21）市原豊太訳『オーベルマン』（上）（一九四〇・五、岩波文庫）

（22）清水昭三『芥川龍之介の夢「海軍機関学校」若い英語教官の日』（二〇〇七・三、原書房）に、「猛暑も去った秋読むと、この初夏の、海上の、艦上の、砲塔の十四吋上に羽を休めた褄黒蝶と出会った芥川の体験記は、なかなかに味の深い文章だということが理解され、納得されてくる。」とある。

（23）初出の『時事新報』（大六・七・二五～二九）には「初夏を劬はるやうな心持で、蝶の共に懐しく」と書かれている。「劬はる」という表現にも、平和な世界への慈しみを見ることが出来る。

（24）『中央公論』第七五八号（一九五二・三）

（25）『芥川龍之介全集第二二巻』「後記（入社の辞）」（一九九七・一〇、岩波書店）によれば、入社当時この文章を紙面に掲載することは出来ず、昭和二年一〇月発行『騒人』第二巻第一〇号の薄田泣菫「芥川龍之介氏の事」の中で紹介された。その文末に「大正八年三月」とある。

（26）芥川龍之介「追憶」（大一五・四～昭二・二、『文芸春秋』第四年第四号～第五年第二号）

（27）高橋龍夫「「蜜柑」における手法―「私」の存在の意味―」（『芥川龍之介作品論集成第五巻』一九九九・七、翰林書房）に、横須賀とは、「いわば国家の利害関係に絡んだ人間の醜い争いや目論見を、海軍による軍港管理や巨大な軍艦の存在や大勢の海兵の養成といった、個人の力ではまったく歯が立たない鉄の「形」と国家の「力」とで現前させる脅威的な磁場の中心であったはずである。」とある。

（28）「侏儒の言葉」には、他にも軍への辛辣な言葉がある。例えば「軍事教育」には「軍事教育と言ふものは畢竟只軍事用語の知識を与へるばかりである。その他の知識や訓練は何も特に軍事教育を待つた後に得られるものではない。（略）すると軍事教育と言ふものは事実上ないものと言はなければならぬ。事実上ないもの、利害得失は勿論問題にはならぬ筈である。」とある。

※芥川龍之介の文章は、『芥川龍之介全集』（一九九五・一一～一九九八・三、岩波書店）に拠り、ルビ等は適宜省略した。

―つかもと・あきこ、甲南大学教授―